

在京白聖會報

第5号

平成10年9月7日

第二九回總會開催、二六〇名が集う！

母校の一一八周年創立記念日である五月十三日、浜松町の国際貿易センタービルで恒例の在京白聖会總會（第29回）が開催されました。昨年までお世話になっていた東郷神社記念館（松橋宮司）から、場所を変えての總會。二六〇名の参加者は、ひとときの「白聖の夜」を楽しみました。

今年の總會幹事である昭和41年卒のみなさんが、この日のために準備した企画で盛大な總會が催されました。開会に先立ち、ステージでは和田健



君（平成6年卒）が率いる東京大学オーケストラによる弦楽四重奏の調べ（写真上）。「文化の白聖」を象徴するオープニングに参加者は拍手喝采。大平洋司副会長（昭26年卒）の開会のことばに続き、及川昭吾会長（昭25年卒）による挨拶が述べられました。母校から来賓として、わざわざ佐々木



美酒をくみかわす（手前は及川会長）

発行 在京白聖会

東京都港区虎ノ門二丁目十六番八号

飯島ビル202号

星野健秀法律事務所内

TEL 03 (3506) 8844

FAX 03 (3503) 7854



「世に詠われし浩然の…」

繁夫教頭（昭41年卒）がかけつけ、現在の白聖校の活躍を伝えながら祝辞を述べました。總會議事では、星野健秀事務局長（昭43年卒）から会計など会務の報告・提案があり、満場です承されました。

總會のあと、参加者の最長老である一戸将慈先輩（昭6年卒）による力強い乾杯の音頭で懇親会がスタート。平成卒の大学生から、盛岡中学の大先輩まで、世代は違っても同じ白聖の学舎に学び、同じ真紅の旗のもとに集った一体感で、会場はすっかり白聖一色。



準備作業をする昭和41年卒業生

酔いもほどよく、宴が盛りあがった頃、總會幹事で元応援団長の白石源次郎常任幹事（昭41年卒）の旗振りによる応援歌合唱そして校歌斉唱で、白聖ムードは最高潮に達しました。最後に、今年度幹事から次年度幹事である昭和42年卒の代表へバトンタッチ。会が終わっても余韻さめやらず、それぞれ級友との旧交を暖めようと、大都会の夜の帳に散っていききました。昭和41年卒業生のみなさん、本当にご苦労様でした。

中



私は昭和二十八年三月、志を抱いて盛岡一高に入学した。盛岡一高は歴代の日本の指導者を輩出した学校であり、その伝統を学びたいという一心であった。入学にあたり自らに課したことは、将来日本の指導者たるべく心身をみがき、人格を陶冶することであった。

自彊寮では集団生活の中での生きかたを学び、柔道部で身体を鍛え、知性も大いに伸ばそうと試みたが、入学早々の「高校の勉強は大学入試によって完結する」という先生の言葉に失望

バンカラと自由

玉澤 徳一郎（昭31年卒）

した。授業は想像力と創造力をかきたてられない暗記一辺倒の無味乾燥としたものだった。かつての旧制一高がその範とした英国パブリックスクールの「自由と規律」の精神は無に等しかった。

そこで私は知育に偏った校風を是正するため、運動部の強化による人格の錬磨に力を入れた。体育委員長として運動部の強化を遂行し、結果、高総体において十二本の県大会優勝旗を獲得した。心身を鍛えることは部活動にと



応援団の後輩達と談笑する玉澤さん（中央）

どまらず、応援団長として徹頭徹尾バンカラ哲学を貫き、下駄で岩手山登頂、ドラム缶のいかだによる北上川下り（盛岡―石巻間）、雪中の盛岡から姫神山頂への縦走、授業をサボっての上田のNHK放送の鉄柱アンテナへの登頂などなど、書き上げればきりがありません。さまざまな冒険にも挑戦した。

こう書くといかにも破天荒な生活ぶりばかりが突出してくるが、しかし、この自由は「生徒を一個の人格として認めてくれた大人と大人の約束」とい

うバックボーンがあつてのことである。自由奔放に生きる私が決して忘れなかったのは、学校と生徒という大きな柱である。自分の責任において、必ず綿密な計画を立て、学校側に迷惑がからぬよう納得が行くまで考慮した。資金も有志のカンパに頼り、個人の冒險旅行のために学校の部活動をないがしろにせず柔道部主将、応援団長、体育委員長としての任を果たした。そして、何より大事なそれはそうやって責任の所在を明確にしさえすれば可能な限

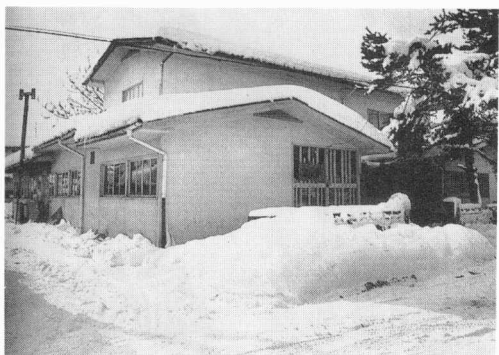
り私の自由を認めてくれる先生が少なからずおられたということである。つまり私と先生たちとは対等な大人の約束で結ばれていた。お互いの人格を尊重し合い、やりたいことをやるからには責任を取る、というのが先生方とむすんだ暗黙のルールだった。そのルールを守ることににより、私らは大人の自覚を持たせて頂いたように思う。

現在の教育現場に目を向けると、「個人の自由が尊重される。」が曲解され、間違った自由を謳歌する高校生

が増えているのは残念である。我々が一高で謳歌した自由は、個人の自覚と責任に基づき、どのようにでも膨らませることが出来る真の自由であった。現在の高校教育現場は生徒を余りにも子供扱いの目で縛り過ぎてはいないか？我々はなぜ生き、勉強しなければならぬのか？先生と生徒が同じ視線にたち、魂をぶつけ合って人間としての根幹にかかわることを話し合う時間が余りにも少ないことをとても残念に思う。

青春時代を豊かに過ごさせて頂いた我々が盛岡一高の恩師の皆様改めて感謝申し上げ、感慨に更けるばかりでなく現在の教育現場に生かしていく道を探っていきたいと思う。

（元防衛庁長官）



「雪の自彊寮」

白聖人脈

五靈觀徳之祥



書家 佐藤法雄君（昭50年卒）

美術界、音楽界、文学界……と芸術分野でもそうそうたる人材を輩出してきた白聖校において、書道界に勇躍登場したのが、わが同期の佐藤法雄君。小学生の頃に始めた書道がきっかけで書家となった同君だが、今や押しも押されぬ日本書道界の若きホープ。一高在校中にも、県の芸術祭で三年連続最優秀賞を受賞するなど、早くもその書才を窺わせていた。

立教大学進学後は、一高の先輩でもある浅沼一道氏（本名栄一・昭和二十七年卒、本紙の題字担当）に師事、筆刻（筆書による印刻）を高石峯氏に師事。大学四年時、書宗院無鑑査にも推薦され、卒業後も躊躇うことなく書の世界へと進んだ。

昭和五十七年には北方書展最高賞、同六十年から三年連続で日本書人展桑原翠邦賞を受賞するなど、斯界でも地歩を固め、平成四年ソウルで開催され

た「国際篆刻展」、同六年には「世界書美術展」に出品するなど、その活躍の場を大きく広げている。

同時に篆刻に関する独自の研究も続けており、特に「漢委奴國王」銘の金印についての研究は十年近くも続けており、平成四年ソウルで開催された「国際篆刻セミナー」では、日本を代表して「金印再考」の研究論文を発表している。この研究は現在も続けられており、年内には学会での発表も予定。さらには出版も準備している。

また、昨年は自ら鴻文会を主宰。鴻文会展も開催している。来年には銀座での個展も予定。

「一年後には盛岡での個展も計画しています。同窓生の皆様にもご高覧を仰ぎたい」

なお、佐藤君は池袋で、白聖の仲間らに書道教室を開いているとのこと。

【村岡智恵（昭50年卒）記】

長寿時代に示された先輩の生き方

小田島雅也（昭28年卒）

暑さ、寒さも彼岸まで、例年なら八月は酷暑！であるが今年の夏は異常といえよう。

しかし暦は秋を示し敬老の日を迎えようとしている。居間に座り団扇で風を入れながら春に行われた村井先生（愛称トッチャン）の九十二才を祝うパーティーを思い出した。

横浜中華街の中華飯店に、先生を待ちうける教え子たち（全員が還暦を超え。古希に至る）は、現れた先生の元気に圧倒されたのである。同期生であるご子息と一緒に来られたとはいえ、落着いた足取りで入場され、席につかれた。ビールを呑みながら教え子達の挨拶にはしっかり応答され、まさに長寿時代の鑑であった。一同を代表して挨拶された先輩が「まさに私共の二十年後の生き方を、身をもって示してくれている先生です」と言われたが、けだし名言であると思う。

その後しばらくして千葉実年大学の講演会があり、日本エアロビクス・センター顧問 内田さんの話を聞く機会があった。

講師は九十四才、朱色のブレザーの胸には鮮やかなエンブレム、颯爽と壇上に登場された。

演題は「超高齢社会への挑戦」、幼少時の虚弱体質を克服し、週五日間はゴルフ場へ行きプレーを楽しむという。ちなみにゴルフを始めたのは五十九才で、八十三才の時に一日百二十六ホール（七ラウンド）を回り、ギネスブックに掲載されたという。百才にしてグリーンに立つ」といって自己研鑽を続けておるといふ話であった。

長寿時代を迎えるに当り、人それぞれ各人の生き甲斐を求めて努力を続けるわけであるが、このように九十才を超える人生の大先輩が「長寿時代の生き方」について身をもって示してくれている気がしてならない。

そのためにも身も心もリフレッシュに勉め有意義な人生を目指したいと思う。敬老の日を前に改めて目標を確認した次第である。



来年は在京白堊会三〇周年

記念会報を発行します

在京白堊会は、昭和四十三年八月に設立されて以来、来年で三〇周年を迎えます。

当時、盛岡一高野球部が甲子園全国大会に岩手県代表として出場し、さらに晴れ舞台で準々決勝まで駒を進めた盛り上がり、在京の白堊OBに工藤佑正先輩（昭十七年卒）が呼びかけて、会を創った歴史を持っています。

以来、三〇年を経て会は年々参加の輪が広がり、発展を続け、今日の在京白堊会があります。

平成二年に、創立二〇周年記念として、記念文集を作成し発行しました。

再来年の白堊一二〇周年を控え、会には三〇周年を迎えるにあたり、記念事業の一環として記念会報を発行することになりました。

七月十四日の幹事会で記念会報発行について了承された後、大平副会長（昭26年卒）を編集委員長として、有志による記念会報編集委員会が発足しました。記念会報は、A4版16ページの冊子で、会の三〇年の歩みや各年次の同期会の活動などを中心に編集され、今後の発展の「道しるべ」にしたものと考えています。

会員同窓生の皆様には、下記の要領で原稿・写真を募集しますので、ご協力ください。

一、「三〇年の会のあゆみ」の原稿・写真

①原稿：在京白堊会での交流や総会などの思い出・話題を八〇〇字程度。

②写真：在京白堊会の総会や幹事会などの写真何枚でも。

二、「各年次の同期会」の原稿・写真



追悼 中村市助さんの思い出

八重畑達男（昭18年卒）

昭和十二年四月、宮古出身の中村市助さんは盛岡中学に入校、寄宿舎生活五年、十七年四月、山形高校へ進学して、司法の道へ進みました。

その間、支那事変、日米開戦の時代の青春の日々でした。戦後の激動の中で勉学、温厚、熱心、愛情に満ちた五十年間の輝ける人生でした。

去る六月十六日、在京白堊会の星野事務局長よりの計報に接し、一年後輩の私が御指導、鞭撻を戴いた、中村先輩との過ぎ去りし日々より思い出深い、やさしいお姿をお伝えして追悼の一文と致します。

昭和五十九年七月、在京岩手県人連

①原稿：各年次の同期会の活動や話題の紹介（盛岡の活動も含めてもよい）

②写真：①の原稿とセットで貸して頂きます。

三、その他、母校・白堊同窓会に関する話題などの原稿

【送り先】

〒一〇五 港区芝二一三一二二
サン・ユー イメージメントネット
ワーク 日向裕司あて

（TEL五四四二一七七七五、
FAX五四四二一八六二二）

合会創立十周年、三陸鉄道開業記念の折、里帰り陸中海岸を旅し、宮古駅前で記念植樹を手植えて、故郷に錦を飾りました。

昭和六十二年三月二十九日、白堊会総会の準備会で中村先輩は実行計画の真面目な意見を述べ、美味しい岩手の酒に酔い一番美しいお顔でした。

本当に次から次へと思ひ出されます。なお、記憶に新しい思い出は、一昨年の「自彊寮設立百年祭」の実行委員として、在京OBのとりまとめ役で大活躍されました。

中村市助さん、ごゆっくりお眠り下さい。さようなら

青春白堊



岩手県人の郷土のシンボルとして愛されている岩手山が、噴火、爆発の危機にあるという。北上川から見た岩手山、岩山から望んだ岩手山、そして白堊校の屋上から眺めた岩手山、どこからも素晴らしい景観で、その絵巻はいつまでも眼に焼き付いている。

あの勇姿は、どれほど私たちの心を慰め、和ませ、奮い立たせてくれたであらうか。人によって、信仰の対象でさえある「神」でもある。啄木や賢治の文学も岩手山によって育てられた、といっても過言ではない。岩手の風土そのものである。

私たちの、まさに「世に詠われし浩然の」大気をここに集めたる「気概は、秀麗高き岩手山の精気によって育まれた。時代は移ろい、二十一世紀を迎えようとしているが、

全てが変わりゆく今日、永く変わらぬものがあってもよいではないか。

わが岩手山よ、どうか火山活動も早く鎮まり、今のままの姿でいてほしい、と切に願うのみである。

（編集子）